

Title	G. ギョームの冠詞論：フランス語の冠詞に関するギョーム理論の展開とその哲学的意味について
Author(s)	柴田, 健志
Citation	京都大学文学部哲学研究室紀要：Prospectus (1999), 2: 43-57
Issue Date	1999-12-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/50703">http://hdl.handle.net/2433/50703</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# G. ギヨームの冠詞論

フランス語の冠詞に関するギヨーム理論の展開と  
その哲学的意味について

柴田健志

## 序論

この論文では、これまでごく一部の言語学者からしか注目されてこなかったギュスターヴ・ギヨームの言語学を論じるつもりである。以下に続く考察の主要な課題は、ギヨームの言語学の中でも特にフランス語の冠詞に関する理論の展開を再構成することにある。フランス語の冠詞を対象にした一連の研究の中で、ギヨームは驚くほど精密な理論を練り上げている。それゆえその理論的展開を再構成するだけでも、言語に対する極めて興味深い洞察をみることができるのだが、我々の関心はこの点のみにあるのではない。我々はこれに加えてギヨームの冠詞論がもつ哲学的意味を考えてみたいのである。とはいえ、誤解しないでいただきたい。我々はここで言語学に対する哲学の影響や、言語学と哲学の外面的な類似を論じたいのではない。あるいはギヨームの理論の中に何らかの言語哲学を読みとろうというのでもない。我々は言語に関するギヨームの思考そのものが、哲学的な課題を体現していたということを示したいのである。ではその哲学的課題とは何か。

哲学者ベルクソンは、本来は運動として存在するものを空間的に表象しようとする傾向が、人間知性のもつ根本的なはたらきであるという。それで、事物の真の姿を捉えるにはこの傾向に逆らって思考しなければならない。そのような思考だけがベルクソンにとっての「哲学」なのであった。しかし運動を空間的に表象しようとする傾向に逆らって思考するというのは、具体的にどのようなことなのだろうか。たしかにこの主張は、ベルクソンの華麗な文体によって表現されることで哲学的メッセージとしては強烈な力で我々の心を打つのだが、その意味を正確に理解することはけっしてたやすいことではない。だが同時に、ベルクソンの意味で哲学するためには、必ずしも専門の哲学者である必要はない。

我々がギヨーム言語学の哲学的意味ということで意図しているところはもうすでにお分かりになったであろう。それはギヨームがその冠詞論を練り上げていく際の思考のあり方そのものが、ベルクソンの掲げた哲学のイメージを体現していたということなのである。

我々は以下でギョームの冠詞論を論じた後、もういちどこの問題に戻ってくることにしよう。

## 1 ソシュールからギョームへ

ギュスターヴ・ギョーム（1883-1960）はソシュール以後の世代に属するフランスの言語学者である。ソシュールの弟子であるアントワーヌ・メイエの指導の下にソシュールの言語学を批判的に継承したギョームは、ソシュールともメイエとも異なる独自の学問体系を築きあげた。ソシュールによるラング／パロールの区別は現在では広く知られているが、この区別は言語という自立した体系とそれによって可能になる個々の発話行為との区別である。こうした区別を導入する際のソシュールの意図は、言語という事象全体からその個人的側面であるパロールを除外し、ラングという体系を言語学の真の対象として確立することにあった<sup>1</sup>。ここでラングは発話行為にかかわる個々の精神のはたらきとは独立した存在者として措定されている。もちろん言語は人々によって話されなければ存在しえない。しかし同時に、言語は個々人の恣意によって造られたものでもない。それゆえ言語を現実存在させるのはほかならぬ我々であるが、同時に我々は言語を使用する際にその内的な構造に則らなければならないのである。このように、経験的には個々のパロールの総体しか存在しないが、理論的对象としては自立した内的構造をもつラングという存在者が考えられうるのである。

ギョームはこの区別をソシュールから引き継いだ。しかしギョームはそこに彼の学問体系にとって本質的な三つの変更をつけ加えたのである。第一に、ギョームはソシュールのいうパロールをディスクール（言語運用）という概念に置き換えている。これは一見するとたんなる用語法の変更にすぎないように見えるが、じつはそうではない。ソシュールにおけるパロールが、専らラングの対概念としてのみ意味をもち、言語学の対象から除外されるためにのみ設定されたのに対して、ギョームにおいてはディスクールにラングと同等の重要性が与えられているからである。

第二の変更は、ラングとパロール（ディスクール）の区別を潜在的なものと現実的なものの区別として再解釈したことである。もっともこの点はソシュールの議論の中で暗示されてはいる。しかしギョームはこの区別を明示した上で、それをもとに最も重要な三つ

---

<sup>1</sup> Ferdinand de Saussure, *Cours de Linguistique Générale*, 1916, édition critique préparé par Tullio Mauro, 1995, éd Payot, p,31

目の変更を加えるのである。ソシュールにおいては言語学の対象はラングであり、パロールはそこから排除されなければならなかった。この意味でソシュールの言語学は「ラングの言語学」<sup>2</sup>と述べている。たしかにソシュールは『一般言語学講義』の中で「パロールの言語学」<sup>3</sup>に言及しその可能性を認めている。しかし大橋保夫によってすでに指摘されているように、ソシュールはパロールの言語学の可能性を認めた上で、本来の言語学はラングの言語学であるという点を強調し、かつ自分はそれしかやらないと述べているのである<sup>4</sup>。これに対してギヨームは、ソシュールのラング／パロールをラング／ディスクールと言い換え、さらにそれを潜在的／現実的の意味づけることで、言語を運用する際の我々の心的過程を、潜在的なラングがディスクールへと現実化される過程として理解しようとした。そして言語を運用する際の心的メカニズムの分析を言語学の中心的な課題としたのである。もちろん心的メカニズムの分析の目的は、その分析をとおしてラングの内的構造を明らかにすることにある。この意味でギヨームの言語学もまた「ラングの言語学」であり、ソシュールの立場を継承しているといえる。しかし、そのためにディスクールという経験的なレベルでの観察と分析をもとに、ラングの内的構造に関する理論仮説を構成するという方法を体系的に用いたという点において、ソシュールを継承しつつソシュールを越えている<sup>5</sup>。

さてギヨームによれば、言語は精神に従属しない独自の領域の中に存在し、固有の法則をもっている。ここでいう言語の法則とは、ディスクールを支配する経験的な法則のことではない。つまりそれは具体的な用例を収集し整理しただけではみえてこない。ギヨームのいう言語の法則とは、経験的な法則を体系的に説明しうるより高次の法則として考えられているのである。換言すれば、経験的に観察することのできる運用規則そのものを生み出すような原理となるようなものが、ギヨームのいう法則である。それゆえラングのもつ内的構造つまりその法則は、経験的な言語運用における心的メカニズムの分析をもとにしながらも、経験的には観察することのできない仮説として提示されなければならないのである。ギヨームは明らかに、ラングの内的構造を理解する方法として、経験からの帰納を退けている。その結果、ギヨームの言語学は極めて思弁的な性格をもつことになる。ギヨ

<sup>2</sup> *ibid.*, p.36

<sup>3</sup> *ibid.*

<sup>4</sup> 大橋保夫「ソシュールと日本 服部・時枝言語過程説論争の再検討(下)」『みすず』1973, 9月号, p.14

<sup>5</sup> ジル・ドゥルーズはギヨーム言語学における潜在(virtuel)の概念の重要性に注意を促し、その中にソシュールの発想をより忠実に発展させた現代音韻論を越える可能性が含まれているということを指摘している。Cf. Gilles Deleuze, *Différence et Répétition*, 1968, PUF, p.265

ームの言語学が言語学者からしばしば敬遠されてきた理由のひとつは、この思弁的な性格にあるといってよいのである。

## 2 二つの冠詞論

ギョームが始めに取り組んだのはフランス語の冠詞体系に関する研究であった。1919年に博士号請求論文として高等研究院に提出された『冠詞の問題とフランス語におけるその解決』<sup>6</sup>がその成果である。ギョーム言語学のもつ思弁的性格はその中にすでに顕著な形で認められる。ところがその二五年後の1944年に『現代フランス語』誌に発表された「フランス語の冠詞体系における個別化と一般化」<sup>7</sup>という、短いけれども洞察に満ちた論文において、フランス語の冠詞に対するギョームの仮説は大きく変化している。この変化の中には、ギョームの冠詞論の展開が体現する哲学的思考という我々の問題意識からみて極めて重要な点が含まれている。

さて自然科学における理論仮説が数学的記号によって表現されるのに対して、人文科学においてはそれがしばしば何らかのイメージを介して与えられている<sup>8</sup>。以下でみるように、ギョームの仮説はまさにそうである。しかもギョームは、そのイメージを用いて理論を構成する際に、比喩的な表現に訴えている。しかしそのような理論は全く曖昧なものたらざるをえないだろう。前期冠詞論から後期冠詞論への変化は、このような曖昧な理論構成を純化し、確定した意味をもつイメージを提示することに向けての思考の発展として解釈しうる。我々は以下でギョームの二つの冠詞論を比較検討し、その変化の内実がいかなるものであるかを明らかにしていこう。

---

<sup>6</sup> Gustave Guillaume, *Le Problème de l'Article et sa Solution dans la Langue Française*, 1975, rééd. Nizet-Presses de l'Université Laval (以下 PA と略記)

<sup>7</sup> Gustave Guillaume, "Particularisation et Généralisation dans le Système des Articles Français", *Langage et Science du Langage*, 1984, Nizet-Presses de l'Université Laval (以下 LSL と略記)

<sup>8</sup> ピエール・デュエムはこの点に関して興味深い指摘をしている。デュエムによれば、具体的なイメージを「モデル」として提示し、それをもとに物理理論を構成していく独特の傾向がイギリスの物理学者に共通してみられる。Cf. Pierre Duhem, *La Théorie Physique, son objet, sa structure*, 1914, reproduction fac-similé 1993, Vrin, pp.77-154 この点からすれば、イメージによる理論構成の有無によって自然科学と人文科学を区別することはできない。それゆえより厳密には、人文科学の特徴はそのようなモデルに数学的定式化が伴わないという点に見出されなければならない。

## 2-1 前期冠詞論

現代語の中で最も冠詞が発達しているといわれるフランス語においては、定冠詞の *le* (女性形は *la*)、不定冠詞の *un* (女性形は *une*)、さらにそれらの複数形 *les, des* (複数形には男性／女性の区別はない) と、主に抽象名詞や物質名詞に用いられる部分冠詞 *du* (女性形は *de la*) という合わせて五種類の冠詞が使い分けられている (男性／女性を区別すれば八種類)。前期の『冠詞の問題』ではこれらすべてが論じられているが、後期の「個別化と一般化」では特に単数の定冠詞と不定冠詞の用法の区別が問題になっている。我々の目的は前期と後期の冠詞論の対比にあるので、考察の対象を *le, un* に関する議論に限定しよう。

前期冠詞論におけるギョームの基本的な着想は、潜在的な名詞を現実化するものとして冠詞のはたらきを理解しようとする点に存する。固有名を除けば、名詞が表示するのは個物でなく一般概念である。それで、冠詞によって潜在的な名詞を現実化する過程は、我々が一般概念を用いて特定の個物に言及する過程として考えられる。(現代フランス語では固有名にも冠詞が付けられる場合が多々あるが、ここでは固有名の問題には触れない)。そこでギョームは、我々が名詞を用いる際の心的メカニズムを分析することで冠詞の内的構造を解明しようとする。分析の出発点となるのは、具体的な文脈の中でディスクールを構成しようとする際の話し手の心的状態である。ある名詞が意識に呼び起こされたとき、その名詞を受け入れるための内的な「空間」<sup>9</sup>が我々の精神の中に構成されるとギョームはいう。この「空間」という概念は極めて曖昧であり、その意味を十分に汲み取ることは難しい。我々は後に後期冠詞論との対比においてその意味を明確にするつもりであるが、ここではとりあえずギョームの議論に従ってみることにしよう。ギョームによれば、精神の中に設定された空間を名詞のイメージが覆いつくしてしまう場合と、逆にその空間の中で名詞のイメージが浮かび上がる場合とがある。定冠詞 *le* が用いられるのが第一の場合であり、不定冠詞 *un* が用いられるのが第二の場合である。この関係を図解してみよう (図1)。

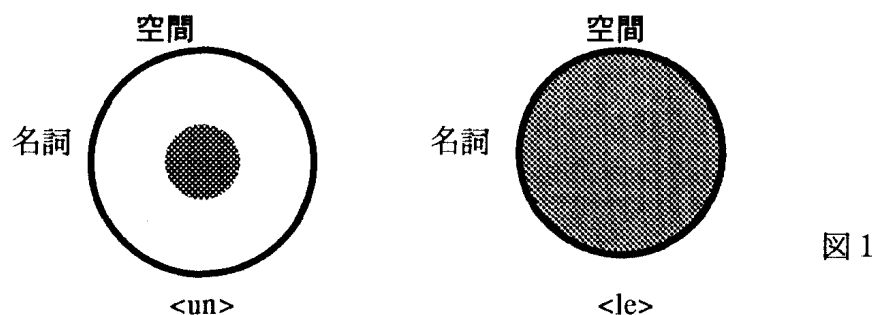


図1

<sup>9</sup> PA, p.59

ギョームによれば、名詞が現実化される心的過程には二つの段階がある。(1) 名詞を受け入れる空間の設定と (2) その空間への名詞の投影である<sup>10</sup>。そして (1) から (2) への移行を規定するのが冠詞のはたらきだというのである。このようにギョームは冠詞のはたらきを解明するために極めて抽象的な思弁を行使し、またそれを表現するためにイメージに訴えている。しかし、「空間」という概念によって何が意味されているかが曖昧である上に、名詞がその空間を覆うとか、その中で浮かび上がるというような比喩がいったいどのような心的過程を表現しようとしているのかが判然としない。ギョームはこのイメージをもとにフランス語の二つの冠詞のはたらきを説明しているのだが、その説明を考察する前に、この二つの冠詞の用法を具体的な例文をもとに示しておこう。これらの冠詞にはそれぞれ名詞を単数の個物に結びつける用法と、その名詞によって指示されうるあらゆる個物に言及する用法とがある。まず前者の個別的用法からみてみよう<sup>11</sup>。

① Je cherche un étudiant qui parle bien français. 誰かフランス語の上手い学生を探している。

② Je cherche l'étudiant qui parle bien français. 例のフランス語の上手い学生がどこにいるか探している。

このように、不定冠詞には不特定の個物に①、定冠詞には特定の個物に②言及するといふはたらきがある。

次に後者の一般化用法をみてみよう<sup>12</sup>。

---

<sup>10</sup> *ibid.*

<sup>11</sup> この二つの例文は次から借用した。大橋保夫 他著『フランス語とはどういう言語か』1993, 駿河台出版社, p.30

<sup>12</sup> この二つの例文はギョームの論文からの引用である。LSL, pp.151-152

ちなみにこうした一般化用法はもともとフランス語の冠詞体系には存在しなかった。名詞を一般的な意味に用いる際にはそれを無冠詞で用いたのである。現代フランス語においても、抽象名詞をただ概念として用いるような場合 (*ce que c'est que vertu*. 徳とは何か) には無冠詞である。なぜならこの場合にはその性質 (徳) が特定の人間の性質として具体化されていないからである。こうした用例を歴史的な観点から網羅した研究として次のものを参照。Cf. F.Brunot-C.Bruneau, *Précis de Grammaire Historique de la Langue Française*, 1969, Masson et Cie, pp.160-181

また定冠詞、不定冠詞の一般化用法がどの時期から始まったかについては、フランス語の歴史の変遷を跡づけた次の研究において、定冠詞については十四世紀以降、不定冠詞については十五世紀以降とされている。Cf. Walther von Wartburg, *Evolution et Structure de la Langue Française*, 1946, Edition Francke Berne, p.134

もっともギョームが問題にしているのはこれらの用法が確立している現代フランス語の体系であ

- ③ Un soldat français sait résister à la fatigue. フランスの兵士は疲労に耐えるすべを知っている。  
 ④ Le soldat français sait résister à la fatigue. フランスの兵士は疲労に耐えるすべを知っている。

この二つの文はどちらも全称命題であり、日本語に翻訳する限りでは意味は同一である。もちろん、フランス語としては微妙なニュアンスの違いがあるのだが、前期ギヨームの理論では、じつはこの点が説明できない。これらの区別については後に触れることにする。

前期ギヨームは定冠詞の二つの用法、つまり我々が上であげた②と④の用法について論じている。なぜ定冠詞 *le* には特定の個物に言及する用法②とあらゆる個物に言及する用法④があるのだろうか。経験主義的な方法ではこの二つの用法があるということを十分な事例によって確認し、それがどのような規則に従っているかを示すにとどまる。これに対して、ギヨームは空間概念による心的過程の分析をもとに、これらの用法を理論的に解明するのである。上でみたように、定冠詞と不定冠詞の選別は、設定された空間を名詞が覆うかそれともその空間の中に名詞が浮かび上がるかに従ってなされるのだった。空間を名詞が覆うときに用いられるのが定冠詞 *le* である。ところでギヨームによれば、名詞が投影される空間は話し手の心的状態に従って広がったり狭かったりすることがあり、広い空間を覆うか狭い空間を覆うかで、定冠詞は二つの用法に別れる。すなわち狭い空間を名詞が覆うとき、特定の個物に言及する②の用法となり、逆に広い空間を名詞が覆うとき、すべての個物に言及する④の用法となるのである。

さてここまでギヨームの議論をたどってくると、「空間」ということでギヨームが何をいおうとしているかが漠然とではあれ理解しうる。それはある名詞によって話し手が言及しようとしている外延の範囲ということであろう。この範囲がその都度の話し手の心的状態に応じて変化し、それが特定の対象に限定されているときには「空間」が狭いといわれるし、逆にそれが無限定の対象に向けられているときには「空間」が広いといわれるのである。そして定冠詞が用いられているということは、その空間を塗りつぶすような仕方で名詞が投影されているということを意味している。

このように、ギヨームの仮説によって定冠詞の二つの用法に一応の説明はつけることができる。しかし他方、この仮説では不定冠詞の二つの用法(①③)が全く説明できない。

---

り、その歴史的生成過程ではないということはいうまでもない。言語の歴史的変化とは独立した研究対象としてソシュールが見出した共時態としてのラングが、ギヨーム言語学においても唯一の研究対象である。なお、冠詞の諸用法の歴史的生成とその共時的体系の区別は、次の論文で論じられている。Cf. “La Question de l’Article”, LSL, pp.157-166

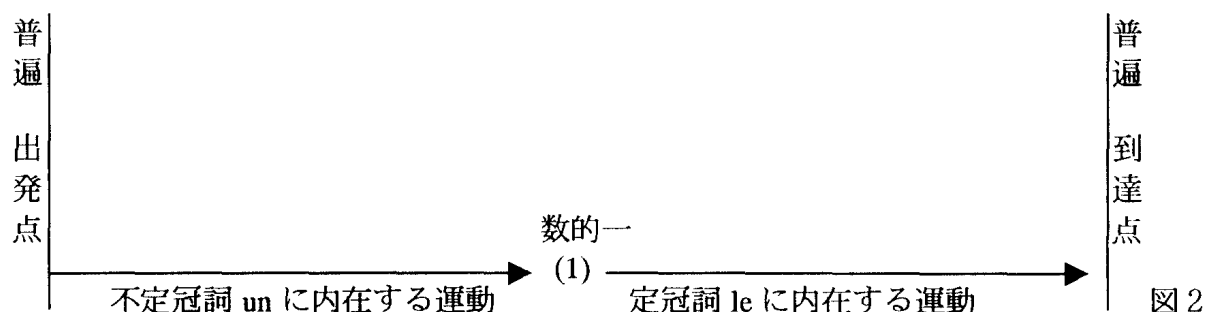


定冠詞と不定冠詞という隣接した事例を体系的に説明できなければ、仮説としては失敗であるというほかない。問題は「空間」という概念の曖昧さもさることながら、空間を名詞が覆うとか空間の中に名詞が浮かび上がるというような、およそどうとでもとれる比喻によって心的メカニズムの分析がなされている点にある。この分析の不徹底さが仮説の失敗を導いたといっても過言でない。ギヨームは、後期冠詞論においてこの分析を全く新しい角度からやり直している。そして冠詞の内的構造に関するより整合的な仮説を提出しているのである。そこでは前期冠詞論にみられる曖昧なイメージが確定したイメージによってかわられることになるだろう。我々は次に前期冠詞論と対比しつつギヨームの後期冠詞論の議論を再構成した上で、この変化が何に存するかを考えてみることにしよう。

## 2-2 後期冠詞論

後期冠詞論においても、冠詞のはたらきは潜在的な名詞をディスクールにおいて現実化することにあるとする基本的な立場は変わっていない。というよりも、この立場はいっそう明確にされている。「冠詞とは、あらゆる外延を許容する潜在状態の名詞から、ディスクールによって規定される外延へと限定された、現実状態の名詞への移行を司る記号である」<sup>13</sup>。後期において変化したのは、名詞の現実化がおこなわれる際の心的メカニズムのとらえ方である。前期冠詞論の失敗は、このメカニズムを名詞を受け入れる「空間」というような意味の不明瞭な概念をもとに理解しようとしたことに起因しているが、後期冠詞論からはこの概念が完全に姿を消している。そこでは「空間」にかわって「運動」の概念が心的メカニズムを理解するための中心的な概念として新たに導入されるのである。

この観点からギヨームが新たに構成した仮説によれば、フランス語の不定冠詞 *un* は人間精神が普遍から出発して個物へと向かう「個別化」の運動を表示するものであり、逆に定冠詞 *le* は人間精神が個物から出発し普遍へと向かう「一般化」の運動を表示するものである<sup>14</sup>。ギヨームはこれを次のように図解している（図2）。



<sup>13</sup> LSL, p.145

<sup>14</sup> LSL, p.146

この図はディスクールにおける冠詞のはたらきではなく、ラングという潜在状態に推定される冠詞の内的構造を表したものである。ラングの領域において、これらの冠詞は矢印によって示された「運動全体」<sup>15</sup>を表示するものである。そして冠詞がディスクールにおいて現実化するときには、こうした運動全体が途中で中断されているとギョームは考えた。普遍から個物へ向かう運動（左の矢印）が、その出発点付近で中断されるとき、精神の運動そのものは個物へと向かっていても、そこからはまだ遠く離れていて普遍の方により近い位置にある。このような位置で現実化された不定冠詞 *un* が例文の③で示されているものである。

③ *Un soldat français sait résister à la fatigue.* フランスの兵士は疲労に耐えるすべを知っている。

また逆に、普遍から個物へと向かう運動（左の矢印）が、出発点である普遍から十分に遠ざかった位置で現実化されるとき、不定冠詞 *un* は例文①で示されているような意味で用いられるだろう。

① *Je cherche un étudiant qui parle bien français.* 誰かフランス語の上手い学生を探している。

ただしこの場合の *un* は矢印の終点にある数的一と混同されてはならない<sup>16</sup>。上の例文の *un étudiant* はあくまで「ある学生」を意味するものとして用いられているのであって、決して「ひとりの学生」を意味するために用いられているのではない<sup>17</sup>。

このように、前期冠詞論においては全く説明できなかった不定冠詞の二つの用法が、運動概念にもとづく後期冠詞論においては見事に説明されている。その上、不定冠詞による全称命題③と定冠詞による全称命題④のニュアンスの差異も、後期冠詞論においては体系的に説明されているのである。我々は次に、まず定冠詞の二つの用法に関する説明をみておいた上で、このニュアンスの差異に関するギョームの議論を考察していこう。

不定冠詞が表示する運動が普遍から個物へ向かうものであったのに対して、定冠詞が表示するのは個物から普遍へ向かう運動（右の矢印）である。この運動が出発点の数的一から遠く離れた位置で中断されるとき、精神はそれが向かっていた普遍的な観点に到達して

<sup>15</sup> *ibid.*

<sup>16</sup> LSL, p.146, 148

<sup>17</sup> この理由をギョームは注（12）であげた論文で説明している。しかしこの点は我々の論文の目的には直接関係しないので、その内容に言及することはここでは差し控える。

いる。この位置で現実化された定冠詞 *le* が例文④で示されているものである。

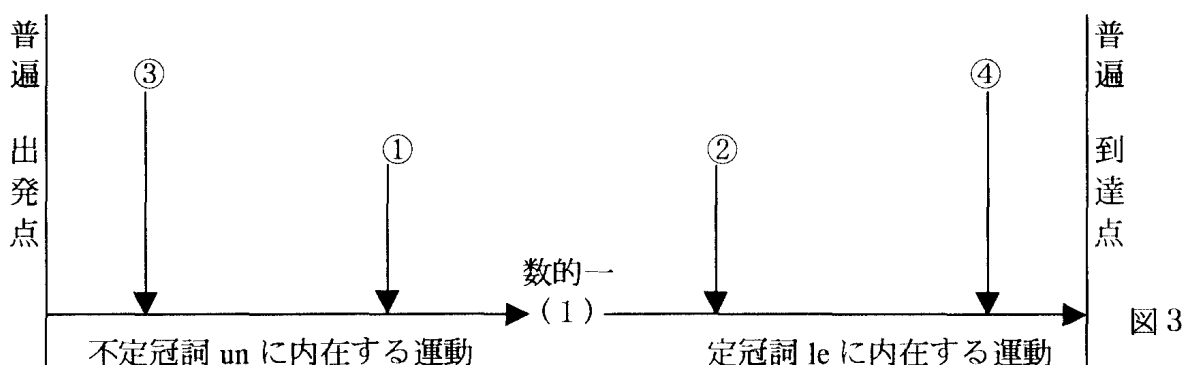
④ *Le soldat français sait résister à la fatigue.* フランスの兵士は疲労に耐えるすべを知っている。

またこの同じ運動が出発点の付近で中断されて現実化するとき、定冠詞 *le* は例文②のような意味で用いられる。

② *Je cherche l'étudiant qui parle bien français.* 例のフランス語の上手い学生がどこにいるか探している。

先程の例文①がフランス語ができるという一般的な属性の側からその属性をもつ個人を志向しているのに対して、この例文②は特定の個人をフランス語ができるという一般的な属性によって規定しようとしているのである。

不定冠詞と定冠詞が表示する逆方向の運動における四つの位置は、次のように図解できる（図3）。これは図1に垂直の矢印を書き加えたものであり、この垂直の矢印は精神の運動が中断される位置を示している。なお上に付したのは例文の番号である。



このような垂直線は何本でも書き足すことができる。つまり精神の運動が中断される位置は無数にあり、それがどこでなされるかは文脈に依存している。したがってディスコースルにおいて現実化された冠詞にはじつは無限のニュアンスがありうるのである。こうしたニュアンスの違いを生み出す心的メカニズムの分析には、想像する以上に多くの時間が割かれたであろう。ディスコースルのレベルにおける十分な観察と分析があったからこそ、ラングのレベルにおける冠詞の内的構造に関してこのような強力な仮説が構成されえたはずなのである。

ではこの新たな仮説の下で不定冠詞による全称命題③と定冠詞による全称命題④のニュアンスの違いがどのように説明されるかを考えてみよう。

③ Un soldat français sait résister à la fatigue. フランスの兵士は疲労に耐えるすべを知っている。

④ Le soldat français sait résister à la fatigue. フランスの兵士は疲労に耐えるすべを知っている。

すでに述べたがこの二つの文は日本語に訳してしまえば意味は同じである。しかしフランス語としてのニュアンスの違いは当然あるだろうし、経験的な手法によって多くの事例をつみ重ねることで、その違いをフランス語を母語としない人にも感じとらせることはできるだろう。むしろそのような経験的な手法においても正確な観察と細心の分析が要求されることはいうまでもない。この点で経験的な手法を決して軽視すべきではない。しかしギヨーム言語学の特色は、こうした経験的レベルからいったん離れて思弁的な仕方で仮説を構成し、その仮説によって経験的に確証されうる諸用法を説明することにある。では上の二つの用法の差異に関するギヨームの説明はどのようなものなのだろうか。

図3から明らかなように、③④は位置においては等しい。つまりどちらも数的一から遠ざかった普遍の近傍に位置している。しかしながら、位置において等しいとしても運動の方向が逆であることは一目瞭然であろう。同じ全称命題として述べられていても、そのとき精神が向かっている方向は正反対なのである。すなわち③は普遍から個物へと向かっていく心的状態において現実化されたディスクールであり、逆に④は個物から普遍へと向かっていく心的状態において現実化されたディスクールなのである<sup>18</sup>。問題はこの方向の違いが何を意味するかである。ギヨームのいうディスクールは、たんなる発話行為でなく具体的な文脈に規定された言語運用であり、複雑な仕方で決定された心的状態を含んだ概念である。それゆえにディスクールにおける経験法則を説明する仮説の設定は具体的な文脈における心的メカニズムの解明なしには考えられないのである。そこで③④の方向の違いを具体的な文脈の中に置き直してみよう。くり返していえば、③の文は位置においては普遍の近傍に位置し方向においては個物に向かっている。ではこの文を発している話し手が志向している個別的なフランス兵とは誰なのだろうか。ギヨームはこの型の用法において運動の終点に位置する個物はしばしばその話し手自身であると指摘している<sup>19</sup>。それでこの文は、あるフランス兵が自分自身へと向かう運動をその出発点で中断し、いわば普遍的

<sup>18</sup> LSL, pp.151-152

<sup>19</sup> LSL, p.151

な仕方では自分について語っているという文脈の中でこそよりよく理解されるだろう。暗に自分に言及するためになぜ普遍から出発するかといえば、用いられる名詞自体が一般名詞だからである。一般名詞を用いる際には我々の心的メカニズムは必ず普遍を出発点にして作動し始めるのである。

この文脈をさらに具体的にみてみよう。あまりの疲労ぶりゆえに周りから同情されたあるフランス兵が、同情されることを潔しとせず、「自分はこれぐらいの疲労には耐えられるのであります」というべきところを、自分がその一員であるフランス兵に共通する属性として表現しようとする場合に、運動としては個物（自分）に向かっているので不定冠詞 *un* が用いられるが、その運動が出発点付近の位置で中断されたため、こうした全てのフランス兵に言及するような文が生成しているのである<sup>20</sup>。これに対して、定冠詞によって全ての個物に言及する用法④においては普遍から出発した精神の運動が数的一を乗り越え、そこを新たな出発点として普遍に向かっている。すなわちこのとき精神の運動は個別的なイメージから遠ざかる方向にある。したがって、その個別者がかりに自分自身であったとしても、この文はもはや自分自身には向けられておらず、かえってどのフランス兵にもあてはまる共通属性を極めて一般的に表現した文であるということができる。

以上が、前期冠詞論との対比という観点から再構成された後期冠詞論の主要な論点である。前期冠詞論が「空間」概念による仮説であったとすれば、後期冠詞論は「運動」概念による仮説であるといえる。もっともこの仮説にも問題点はある。というのもこうした思弁的仮説がいかんして検証されうるかという点について、ギョームはひとことも述べていないからだ。思弁としては極めて魅力的であったとしても、こうした仮説がたんなる空想とは区別される点が明示されなければ、それは学問的な意味で仮説たりえない。この問題はじつはギョームの言語学全体に対して突きつけられるものであり、簡単に論じることはいできない。この点についてはあらためて考えなければならないが、この論文に限って言えば、我々の関心はむしろ次の点にある。始めに述べたように、こうした仮説の変化は一貫した方法の下で理論が発展していく過程として解釈することができる。そこで我々は最後にこの発展の内実がどのようなものだったかを考えてみることにしよう。

### 3 空間と運動

ギョームによれば、我々が言語を運用する際の心的過程とは、潜在状態にあるラングを

---

<sup>20</sup> LSL, p.153

ディスクールへと現実化する過程として考えられる。この意味でディスクールとは心的メカニズムによって生み出される結果にすぎない。そして一定の結果をもたらす心的メカニズムの分析をもとに、ディスクールにおいて現実化されるラングの内的構造に関する仮説を提示することがギヨーム言語学の課題である。こうした課題の下に、前期冠詞論では潜在状態の名詞を現実化するための記号として、冠詞の内的構造が取り出されたのである。しかしその内容は我々がすでに示したとおり不十分なものであった。ギヨーム自身、後期冠詞論において彼が到達した地点から、その不十分さを認めることになった。「『冠詞の問題』における」定義は厳密ではあるが完全なものではない<sup>21</sup>とギヨームは述べている。前期冠詞論では名詞の現実化を理論化することはできても、名詞を現実化する記号である冠詞そのものの現実化という問題が放置されていた。後期冠詞論ではこの点が克服され、冠詞は自己現実化 (auto-réalization) の機能をもつ記号である (名詞のように他の記号によって現実化されるのではなくそれ自身で現実化する) と明言され<sup>22</sup>、その現実化の内容が明確に示されている。すなわち潜在状態における冠詞は普遍から個物、個物から普遍への運動全体を表示する記号であるが、それが現実化する際にはその運動がどこかで中断され、ディスクールにおける冠詞は運動を含んだ点として存在することになるのである<sup>23</sup>。

我々の解釈では、前期ギヨームはディスクールにおいて存在する点としての冠詞が含まれている方向に気づいてはいたが、それを十全なイメージに表現することができなかった。

「空間」を名詞が覆うとか、その中に浮かび上がるというような比喩は、運動の端緒を表現しようとしたものにほかならないが、それは後期から振り返ってはじめていいうることである。前期ギヨームは、本来なら精神の運動を表示するはずの冠詞の内的構造を空間という静的なイメージでとらえてしまっていたといわざるをえない。これに対して、後期冠詞論では心的メカニズムの分析がより精密になり、運動の端緒としてでなく空間に自らを展開していく運動そのものとして冠詞の内的構造をとらえる図式を発見したのである。問題は、こうした心的メカニズムの分析の精密化がどのようにして進展していったかである。この点に関して我々は次のような解釈を提出してみたい。

前期冠詞論では名詞を受け入れる心的な「空間」への名詞の投影を支配する記号として冠詞が理解されていた。設定された空間に名詞のイメージが重なるときには定冠詞が用いられ、逆に空間の中で名詞のイメージが浮かび上がるときには不定冠詞が用いられるのだ

---

<sup>21</sup> LSL, p.154

<sup>22</sup> *ibid.*

<sup>23</sup> LSL, p.155

と考えられていた。我々はギョームの意図を汲み取ってこれを図解してみたが（図1）、この図は後期冠詞論においてギョーム自身が示した図（図2）に連続的に変換することができるのである。不定冠詞 *un* を例にとってこの点を示してみよう。不定冠詞の内的構造は前期では図4のように、後期では図6のように示されていた。前期の図を後期の図に変換するには、これらを次のような図によって媒介すればよい（図5）。

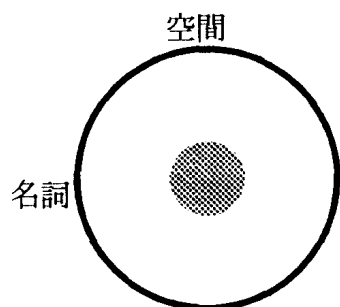


図4

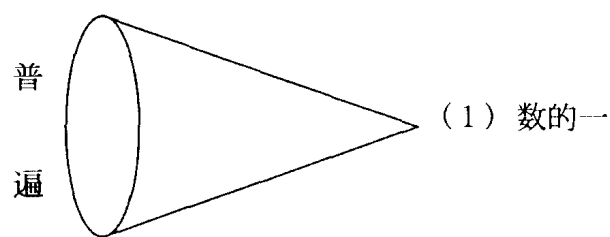


図5

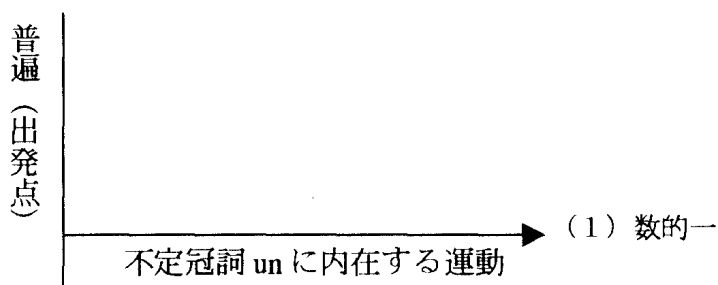


図6

図5は後期の普遍から個物に向かう運動から運動性を抽象して、そのパースペクティブのみを表したものである。前期の図はパースペクティブを表すこの円錐の切断面と考えられる。

ところで、円錐が無数の切断面をもつように、パースペクティブの奥行きにも無数の度合いがあり、かつそれらは連続的に理解できる。冠詞を用いる際の様々なニュアンスの差異がこの無数のパースペクティブに対応していることはいうまでもない。ギョームは冠詞の様々なニュアンスを厳密に観察し分析した結果、それらの連続性に気付き、そこから運動概念へと移動していったのではないかとと思われる。そうだとすれば、これは驚くべき精妙な思考である。逆に前期冠詞論では冠詞のもつ名詞の現実化機能に重点が置かれていたために、空間の広さ狭さという議論はなされても、その広さ狭さが生じるメカニズムの発見には到らなかったのではないかと推測されるのである。

このように、前期冠詞論から後期冠詞論への理論的移行は、平面からパースペクティヴへ、パースペクティヴから運動へのイメージの発展として解釈されうるのである。ギョームの後期冠詞論が前期冠詞論からの発展であり、その理論的純化であるという解釈にたつならば、その発展のあり方は、空間的に表象されたものの中に運動の端緒を見出すような思考から、運動そのものへと進んでいくようなものとして表現することができるだろう。こうした思考法について哲学的な観点からコメントを加え、ギョームの理論的展開をより理念的に意味づけることでこの論文を終えることにしよう。

#### 4 まとめ

哲学者ベルクソンは、運動そのものと運動の描いた軌跡を混同してしまう傾向を人間知性の中に認め、こうした混同が多く哲学誤謬の源泉であるとみなしていた。例えば我々が自分の手を上にあげるという動作はひとつの運動であるが、我々はこの運動が描いた軌跡によって運動を表象することができる。このこと自体に問題はない。しかしいったん運動がそのような仕方では表象されてしまうと、運動そのものとその空間的表象である運動の軌跡とは容易に混同されてしまうとベルクソンはいう。この混同を明瞭に示すのが、点の集合によって運動を再構成しようとする誤謬である。もちろん点の集合によって運動を再構成することはできない。ベルクソンによれば、運動に関するゼノンの三つのパラドックスはこうした誤謬の寓意的表現なのだ<sup>24</sup>。

前期冠詞論から後期冠詞論へのギョームの理論的発展は、こうした人間知性の傾向に逆らって思考しようとした哲学的努力の所産とみることができる。ベルクソンの言葉を借りていえば、それは運動を空間的に表象しようとする「思考の自然な流れに逆らって」<sup>25</sup>なされた思考の道筋であるといつてよい。しかもギョームは、このような思考がいかに困難なものであるかを、前期冠詞論の失敗とその修正の道筋をとおして体現している。ギョームはフランス語の冠詞体系を思弁的に理論化する過程で、まさにベルクソンの哲学を実践していたのである。

(日本学術振興会特別研究員)

<sup>24</sup> Bergson, *Matière et Mémoire*, Œuvres, éd. Centenaire, 4<sup>e</sup> éd. 1984, PUF, pp.324-329

<sup>25</sup> Bergson, *La Pensée et le Mouvant*, Œuvres, p.1415